

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

「好き」の形

北辰中学校三年

大田 おおた

歩佳 あゆか

桜並木の前を通った時、ふと昔を思い出した。まだ音楽を純粹に好きでいられた頃のことだ。昔一生懸命作った曲のこと、曲を歌う時のわくわく感、曲のタイトル。すべて忘れてゆく。売れるほど、評価されるほど皆が本当に自分の曲を聴いてくれているのか分からなくなる。メディアで『日本を代表する歌手』と紹介された故、皆良い曲と錯覚しているだけではないか。ひねくれている、と思われるかもしれない。だがそんな考えが常に頭にいる。

一本の桜の下にいる少年が目に入った。中学生くらいだろうか。彼は隣にギターを置いて座り、ノートに何か書いているようだった。曲を作っているのかもしれない。だとしたらどんな曲だろう。興味を持った私は少年に話しかけた。少年は驚いた顔をした後、持っていたノートをどじとサツと自分の後ろに隠してしまった。私は彼に聞いた。

「曲を書いているの？」

少年は少し恥ずかしそうに、でも力強くうなずいた。私は笑って音楽が好きなんだね、と言った。彼はまた力強くうなずく。前髪で隠れて顔はあまり見えなかったが、私には彼が嬉しそうに顔をしているように思えた。将来の夢を聞くと、

「自分で作詞作曲をして歌えるようなスゴい歌手になりたいんだ！」

と少年は明るく楽しそうに言った。そんな彼がとても眩しく見えた。私もきつとそうだった。純粹に夢を見ていた。歌手になるんだ、と。好きな事、好きな物をずっと好きでいることができたならどんなに幸せだっただろう。夢を見ていた僕はもういない。残っているのはどこか冷めていてつまらない私だけだ。音楽を作ることの楽しさも忘れてしまった私にはもう音楽を続ける資格はないのかもしれない。こんな感情で続けていても良い曲など作れはしない。

「どうしたの？」

急に話しかけられはつとする。彼は急に俯いた私を心配しているようだった。自分の苦悩を話してしまいたい、という衝動に駆られる。口を

開きかけてとどまる。それを彼に伝えることは彼の夢を壊すことと一緒に。彼には、私のように自暴自棄になったりせず幸せに音楽を作ってほしい。私はそう思い誤魔化すことにした。

「いや、ちよつとしたことだ。夕飯を何にしようか考えていただけだから大丈夫。」

そう言つて笑うと、彼も少しだけ笑った。

「大丈夫だ。音楽が大好きな君ならきつと夢を叶えることができるよ。」私のような大人にはならないでほしい。私の分も音楽を大好きなままでいてほしい。そんな思いを込めながら彼に言った。少年は照れくさそうにありがとう、と言った。私は彼に一つ質問した。

「君の名前は何ていうんだい？」

何気なく聞いた一言だった。

「僕？僕は——だよ。」

少年の名を聞いた途端、私の周りから音が消えた。それほど強い衝撃を受けたのだ。私の名だ。彼は幼い頃の私だ。どうして、と思う。どうして「僕」がここに。ずっと昔の自分に謝りたいと思つていたからだろうか。憧れていたような大人になれなかったこと。自暴自棄になつていったこと。

「私は君の大人になつた姿だよ。」

なんて言える訳なかった。そもそも信じてもらえらると思えないし自分がこんな大人になると知つたら僕は失望するだろう。彼は名前を聞いたきり黙ってしまった私の顔をのぞきこんでいた。

「君にはさっきの曲以外で作つた曲はあるかい？」

私は不思議そうな顔をしている少年に聞いた。

「あるよ。」

彼はそう答えた。私は頼んだ。聴かせてくれ、と。彼はうなずくとギターを持つ。ギターを弾き始めると同時に歌い出す。ああ、懐かしい。昔私が作った曲だ。悩みながら一生懸命作ったものだ。ギターの演奏は少し

拙い。それに昔とはいえ、自分が作った曲だ。なのになぜ私は感動しているのだろう。なぜ雫が頬を伝っているのだろう。ただ眩しかった。純粋な思いが眩しかった。私は、思い出した。歌手を志した理由を。この感動だ。曲を聴いた時に感じる感動を伝えるためだ。ありがとう、昔の僕。君のおかげで私は好きの形を思い出せたんだ。私は――

「良かった、ですか？」

少年は聞く。私は黙ってうなずいた。少年はホッとしたようだった。

「タイトルも決めてるんです。雨上がりです。」

一度つらい思いをしてもきつといつか良くなる。そんな意味でつけたタイトルだったな、と私は思い出す。少年は私に言う。

「おじさんは今、つらいのかもしれない。でもいつかきつと晴れるから大丈夫。無責任かもしれないけど絶対大丈夫！」

彼は明るく言う。ありがとうと言うと彼はちよつと笑った後、こつと礼をして、

「またね。」

と言った。だんだん見えなくなっていく彼を見送った後、私も歩き出した。少しずつでいい。変わっていく。きつとまた音楽を楽しめる筈だ。

私は自分の夢を思い出したのだから。

